

土木学会平成 20 年度全国大会
研究討論会 研-11 資料

パーソナリティ X : 世界で活躍する技術者たちの「技」と「義」

座 長 : 田中 弘 日本工営(株)
話題提供者 : 播磨 進 (株)ニュージェック
: 岡部 真佳 山梨大学大学院 (学生)
: 瀧田 陽平 (株)建設技術研究所
: 大谷 仁美 東京大学大学院 (学生)
: 佐藤 正則 エッセイスト

日 時 平成 20 年 9 月 10 日 (水) 16 : 10 ~ 18 : 10
場 所 東北大学 川内北キャンパス
CS-4 会場 B204

コンサルタント委員会

パーソナリティX：世界で活躍する技術者たちの「技」と「義」

主催：コンサルタント委員会

1. 研究討論会の趣旨

国際競争力の向上について議論する切り口は数多いが、コンサルタント委員会では「人材育成」の観点でこれを捉え、わが国の将来を担う若手技術者を対象とした「世界で活躍する技術者たちとの懇話会“夢”」をこれまで7回開催し、7人の士（さむらい）を紹介した小冊子「国づくり人づくりのコンシエルジュ～こんな土木技術者がいる～」（土木学会、平成20年5月）を発刊した。この研究討論会では、ここに登場した技術者の真の「顔」（「技」と「義」）について学生および若手技術者らと熱く語るとともに、国際社会で活躍するための課題を整理する。これらを通して世界に羽ばたこうとする若手技術者へ夢と希望を与える目的でこの討論会を企画した。

2. 開催日時・場所

日 時：平成20年9月10日（水）16:10～18:10
場 所：東北大学 川内北キャンパス CS-4会場 B204

3. 座長および話題提供者

座 長	：田中 弘	日本工営(株)／コンサルタント委員会幹事長
話題提供者	：播磨 進	(株)ニュージェック
	岡部真佳	山梨大学大学院（学生）
	瀧田陽平	(株)建設技術研究所
	大谷仁美	東京大学大学院（学生）
	佐藤正則	エッセイスト（元・日刊建設工業新聞社編集長）

4. 研究討論会の進め方（予定）

- 1) 座長挨拶 討論会の趣旨、話題提供者の紹介と討論会の進め方 田中 弘
- 2) 話題提供者講演
 - ①「世界で活躍する技術者たちの懇話会“夢”」開催の概要と小冊子の紹介
～世界で活躍する技術者のパーソナリティ～ 播磨 進
 - ②海外での仕事に関する学生からの感想 岡部真佳
 - ③若手技術者からの感想 瀧田陽平
 - ④海外での仕事に関する学生からの感想 大谷仁美
 - ⑤「国づくり人づくりのコンシエルジュ」を執筆して 佐藤正則
- 3) 討論（会場との質疑応答を含む）
 - ①「技」に関する討論
 - ②「義」に関する討論
 - ③「夢」に関する討論
- 4) 座長による総括

5. その他

当委員会や本日の研究討論会に関するご意見がございましたら、下記にお送りいただけますと幸いです。 土木学会ホームページ（コンサルタント委員会）

<http://www.isce.or.jp/committee/kenc/index.htm>

～座長および話題提供者の略歴～

■座長

田中 弘（たなか ひろし）

1953年生れ。現在 日本工営(株)技術本部中央研究所 所長。

1979年に大学院工学研究科(土木工学専攻)修了後、同社に入社。以後、主に、地盤工学、耐震工学、地中構造物設計等の分野でのコンサルタント技術者として国内業務に従事。海外案件は、台湾曾文ダム耐震性アセスメントや、断層直上の建民ダム立地安全性検討等のアドバイザースペシャリストとして従事。現業での実務経験および研究所での技術開発・研究業務、2004年からはグループ会社の経営支援を経験した後、2008年より現職。コンサルタント委員会では幹事長。

■話題提供者

播磨 進（はりま すすむ）

1950年生れ。現在 ㈱ニュージェック東北支店 支店長代理。

1973年、理工学部建設基礎工学科を卒業し、同社に入社。以後、コンサルタント技術者として、ダム計画・設計、水資源計画、河川整備計画など、河川に関する国内業務に従事。海外業務に携わる機会はなく、国内専従でこの年までできてしまった。縁あって、このコンサルタント委員会国際競争力小委員会の活動を行うことになり、海外プロジェクトに携わっている方々のエネルギッシュな生き方に感動した。土木技術を通して、社会に貢献するという姿勢は国内外を通じて変わらないと感じた。この活動を通じて、海外を目指す若い技術者のお手伝いをしたいと考えている。同小委員会では幹事。

岡部真佳（おかべ まさよし）

1984年生れ。現在、山梨大学大学院医学工学総合教育部土木環境工学専攻修士2年

群馬高専入学以来、土木構造物に魅せられて土木の道をすすむ決意をする。その後、海外に興味を持ち始め、海外業務のプロジェクトマネージャーを目指している。修論では衛星リモートセンシングを用いたトンレサップ湖（カンボジア）における氾濫原環境把握と魚類生態系モデルの開発をテーマに、現地調査も実施した。また、苦手な英語を勉強中。来年度からは建設会社に就職。7回の懇話会に皆勤。平成18年度より学生委員として参加。

瀧田陽平（たきた ようへい）

1978年生れ。現在、㈱建設技術研究所東北支社勤務。

大学院農学研究科を修了後、学生時代のインドネシアにおける研究を契機に青年海外協力隊を目指すのが、心半ばにして挫折し、紆余曲折を経て現在に至る。青年海外協力隊への憧れを捨てきれず海外での仕事を志すものの、現在は国内河川計画系の仕事に従事。いつかは海外の仕事に就きたいと思いながら日々仕事に励んでいる。

平成18年度より国際協力小委員会委員。

大谷仁美（おおたに ひとみ）

1983 年生れ。現在、東京大学大学院新領域創成科学研究科 国際協力学専攻修士 2 年
大学時代には農学部で農業経済を専攻。中学時代から、国際協力の分野に興味を持つ。卒
論で灌漑開発プロジェクトについて書いたのを契機に、海外のインフラ事業に興味を持つ。
現在は、登壇者の一人である佐藤周一氏が行うインドネシアの小規模灌漑管理事業のプロジ
ェクト地で、水利組合の機能性についてインタビュー調査を行っている。国際競争力小委員
会では、現役の土木技術者の方々から、海外プロジェクトの難しさとやりがいを教えていた
だいた。来年から、農業開発コンサルタントに就職。

佐藤正則（さとう まさのり）

1944 年生れ。文学部国文学科をほとんど勉強せずに卒業し、日刊建設工業新聞社に入社。
入社した 1968 年に、日本初の超高層・霞ヶ関ビル、九頭竜ダムが完成、東名高速道路（一次）
が開通した。80 年代に、21 世紀初頭に建設産業が日本のリーディング産業になると予言する
も見事に外れる。日本のシビル・エンジニアリングはもともと「サステイナブル・エンジニア
リング」の理念に立脚しており、21 世紀半ばにはそれが高く評価されると考えている。2002
年に中東、中南米、東南アジア、アフリカの ODA 前線取材。著書に『大手建設企業の変
貌』（相模書房）、『あなたは公共事業が好きになる』（同）、『ODA が日本を守る』（英光社）
など。

「世界で活躍する技術者たちの懇話会“夢”」開催の概要と小冊子の紹介
～世界で活躍する技術者のパーソナリティ～

播磨 進

1. 「世界で活躍する技術者たちとの懇話会“夢”」の開催と成果

(1) 「国際競争力特別小委員会」の活動方針

21世紀の国際情勢を踏まえ、「国際競争力」強化施策の声が、行政(国策レベル～地域レベル)／教育機関／産業界等、我が国のあらゆる領域で唱えられている。土木学会においても、平成 11 年の定款改正において「土木技術者の資質の向上」を学会活動目的に加え、我が国が国際競争力を高めて国際社会に貢献していくための人的資源の高度化を重視している。コンサルタント委員会でも、その活動方向の主要テーマの一つとして「国際競争力の向上」をあげ、平成 18 年度に、「国際競争力特別小委員会」(小委員長: 廣瀬典昭)を新設した。

この小委員会では、「国際競争力向上と人材育成とは切っても切れない関係にある」との点に注目し、調査研究活動というよりも、コミュニケーション型行事企画を主体とした活動を行なうこととした。

(2) 「世界で活躍する技術者たちとの懇話会“夢”」の開催

1) 目的

世界に通用する技術力に通じる(あるいは将来的に可能性を秘めた)人材を広く紹介する場・機会を創出し、本人ならびにその話題を共有した世界に通じる技術を目指す修習者に対して、その実現可能性への「夢」を与える企画を提供する」ことを目的とした。

2) 登壇者

国際経験が豊富で、世界に通用する技術力を有するコンサルタント、ゼネコン、国際機関などの技術者・研究者

3) 開催場所・時間

土木学会会議室、17 時～19 時

4) 対象者

本質的には広く一般的であるが、実際は学生、建設業界の若手～中堅技術者、若手実用技術研究者

5) 開催記録

平成 19 年 2 月から平成 20 年 4 月にかけて、7 名の土木技術者に登場していただいた(表-1 参照)。懇話会は概ね 2 ヶ月に 1 回のペースで開催した。登壇者は、特別小委員会の委員が所属する会社あるいは知人からの紹介で、海外に長年携わり、現在も色々な立場で活躍されている土木技術者から、これはという方から 7 人を選ばせていただいた。

それぞれの方の現在までの経歴で分けると、コンサルタント 2 名、ゼネコン 3 名、コンサルタントから国際機関を経て大学教授となった方が 1 名、ゼネコンから大学教授になった方が 1 名というように、バラエティに富んだ人選となった。

一方、参加者は、毎回 40 名程度で、コンサルタントとゼネコンの若手社員および学生ほか、熟年技術者からの参加もあった。会場は、できるだけ登壇者と参加者が打ち解けてコミュニケーションが図れるように、登壇者を囲んで半円形に机を配置し、また、お茶とつまみを準備し、リラックスした雰囲気づくりに配慮した。質疑は、特に若い参加者から多数あり、活気に満ちた会となった。また、懇話会終了後は、学会内で缶ビールと軽いつまみで、登壇者および特別小委員会の委員と参加者の懇親会を開いたが、学生のリクルート活動としても有意義な会となった。特に、学生参加者から、小委員会の委員として二人がこの活動に加わってくれたことにより、新鮮な議論ができた。

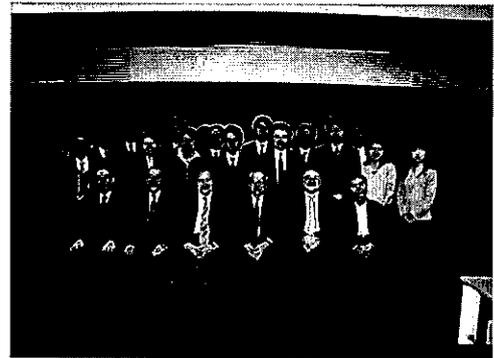
「世界で活躍する技術者たちとの懇話会“夢”」開催記録

主催：土木学会 コンサルタント委員会 国際競争力特別小委員会

会場：土木学会講堂（東京都新宿区四谷）

開催経過： （開催時間：17:00～19:00）

回	開催日	講演者および題目
1	2007 年 2 月 13 日	加藤欣一氏 株式会社パシフィックコン サルタントインターナショナル 「国際開発コンサルタントの夢と行動」
2	4 月 25 日	土屋紋一郎氏 清水建設株式会社 「海外土木屋人生 ー見て、聞いて、考 えた 25 年ー」
3	7 月 4 日	吉田恒昭氏 東京大学大学院 「地球公共財を創る土木技術者」
4	10 月 16 日	佐藤周一氏 日本工営株式会社 「ライフワークの途上国開発 ー東方イ ンドネシア開発 17 年の経験から」
5	11 月 26 日	福田勝行氏 丸磯建設株式会社〔元鹿島 建設株式会社〕 「技術移転で育った技術者たちと共にダ ムの完成を祝う」
6	2008 年 1 月 29 日	草柳俊二氏 高知工科大学 「国際社会を生き抜く技術 “胆力と知 力”」
7	4 月 16 日	市川寛氏 元西松建設株式会社 「海外建設商売覚え書き・海外建設ビジ ネス推進の経験とノウハウ」



「世界で活躍する技術者たちとの懇話会“夢”」登壇者



加藤欣一



土屋紋一郎



吉田恒昭



佐藤周一



福田勝行



市川寛



草柳俊一

(3) 小冊子「国づくり人づくりのコンシエルジュ～こんな土木技術者がいる～」の発行

1) 目的

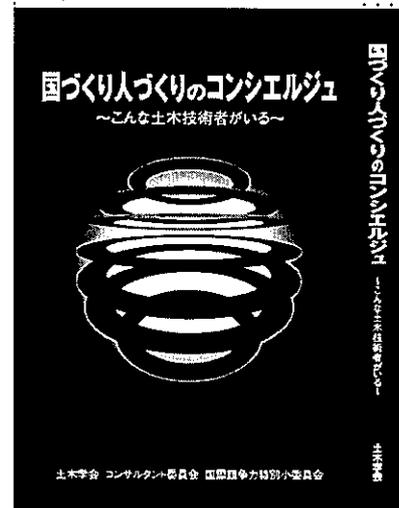
懇話会のフォロー活動として、懇話会の内容をより広く学会員および若い技術者や学生に伝えるため、体験談話をもとに記録原稿を起し、小冊子として発行することにした。執筆者は、客観的な第三者視点と、専門家以外でも興味を抱けるような読み物としての成熟度を高めるため、業界紙等の専門ライターとの協力を得ることにした(小委員会委員：佐藤正則氏)。

2) 小委員会委員の活動

専門ライターの原稿を、査読・校正を兼ねて小委員会の委員全員で検討した。登壇者のパーソナリティを再確認するとともに、国際競争力の向上における課題について議論した。目次構成、用語説明、詳細校正など、小委員会委員が分担して作業を行った。また、書名については、多数の案が出され決定は難航したが、最終的には、土木技術者＝シビル・エンジニアの活躍・魅力を若い人たちにもっと知ってほしいとの気持ちを込めて、上述のような書名にすることにした。

3) 小冊子の販売状況と活用

小冊子の価格は、学生も気軽に購入できるように、定価(税抜き)1,000円と、学会の出版物としては安価に設定してもらった。現在のところ販売は好調のようだが、土木系の学生の海外業務への希望が実現する一助として、さらに高校生などこれから自分の進路を決めようとする若い人たちの参考図書として、活用されることを期待している。なお、中高年の技術者からも読後の感想を数多くいただいております、土木技術者としての誇りを再確認できたなどと好評である。さらに、多くの方に読んでいただくことを切に願っている。



2. 世界で活躍する技術者たちのパーソナリティ

購入申込み先

<http://www.jsce.or.jp/publication/>

懇話会および小冊子から、これから世界での活躍を夢見ている人たちに、多くのメッセージが発信された。その内容は、是非、小冊子を読んで直接確認していただきたいのであるが、項目を私なりに整理すると、次のようになる。

- 1) 海外での仕事に向けた技術者の資質とは何か
- 2) 海外で仕事をしていくための心構え・生活の知恵
- 3) 海外での土木技術者の立場と仕事の特徴—国内との違い—
- 4) 日本人土木技術者の国際競争力をどう評価できるか
- 5) 技術者の国際競争力を向上させるために理解しておくべきこと
 - ◇ グローバリゼーションに対する正しい理解
 - ◇ 国際貢献の意義・必要性・やり方
 - ◇ 日本の建設生産システムの特異性
 - ◇ 土木技術・土木技術者の本質

ここでは、世界で活躍してきた7人の技術者が語る「海外での仕事に向けた技術者の資質」「海外での仕事に取り組む姿勢・注意点」について紹介する。これらの資質および取り組み姿勢は、ご本人が持っておられる資質、海外での仕事への取り組み姿勢そのものであるように受けとめられる。

7 人の登壇者が語る海外の仕事に向けた資質と仕事への取り組み方 (● : 技、○ : 義)

登壇者	海外の仕事に向けた技術者の資質・仕事への取り組み方
加藤欣一氏 (国際開発コンサル タント)	<ul style="list-style-type: none"> ●日本語と日本語の文章を正しく使えること ○ポジティブに捉え、旺盛な好奇心、感性の鋭さがあること ○海外で仕事をしてみたいと思う人は、それだけですでに海外に向いている人である ○海外に向いている人 (ある商社の判断基準) : ・社内や学内に友人が多い人 ・知らない町を散歩するのが好きな人 ・喜怒哀楽を率直に出せる人 ○その国のレベルで物を見る視線があること ●より高度で奥深い能力と事業をサイクルで捉える視点
土屋紋一郎氏 (ゼネコン・プロジ ェクトマネージャ)	<ul style="list-style-type: none"> ○プロジェクト・マネージャーに必要な資質 ・もの造りに情熱を持っていること ・未知のものに挑戦する勇気と実行力 ・どのような環境にも適応できる体力と精神 ・スタッフを指導しまとめあげる力 ・鋭い感性に基づくバランス感覚 ・人を惹きつける人間力 ●海外土木工事の成功のエッセンス ・地域と国の自然条件の的確な把握 ・異文化を理解する心 ・計画は出来る限りシンプルに組み立てる ・フェアな態度と行動 ・現地で入手できるものを利用する ・自己完結の精神と能力
吉田恒昭氏 (コンサルタント→ 国際公務員→大学)	<ul style="list-style-type: none"> ●エンジニアの素養をもつプロジェクト・エコノミスト ○「地球平和につながるインフラ造りを求め続ける一直線の軌道」からはずれていない。 ○若い諸君はぜひ文明工学とは何かを、自分に問いかけて欲しい。 ○土木は何ができるかというテーマから土木技術者は逃げてはいけない
佐藤周一氏 (農業開発コンサル タント)	<ul style="list-style-type: none"> ●コンサルタントのモットー : 「責任」、「柔軟性」、「何か新しいことを」、「現場主義」の 4 つである。 ○成長する人、可能性を秘めている人に共通する基本的資質 : 「積極性」、「誠実さ」、「責任感」の 3 S です ○佐藤語録 : 「真剣は裏切らない」「失敗を恐れるな」「後付けは裏付け」「情報は発信者が得をする」「裏技に本質あり」「別居生活のなかでの夫婦円満の裏技 : 信頼」
福田勝行氏 (ゼネコン・プロジ ェクトマネージャ)	<ul style="list-style-type: none"> ○海外の現場で活躍する途上国の技術者たちの資質 : ・賃金が安いだけでなく、優れた技術を持った人材が増えている。 ・複数の言語に堪能 ・文化、習慣、宗教の異なる海外生活に順応する強さ ・過酷な気候の中でもひるまず現地の食事を食べて頑張る ・厳しい環境や異文化での生活は当然とする心構えができています ●ゼネコンの現場所長の心得 ・契約はすべて文書で ・トラブル処理 ・現地の労働組合との良好な関係構築 ・段取りのよさ ・現地経理に精通する (とにかく損を出さない)
市川 寛氏 (ゼネコン・	<ul style="list-style-type: none"> ○ビジネスで相手に自分を認めさせるためのエッセンス : ・自分の国、民族、文化に外国人と同じ程度の以上の誇りと自尊心を持つこと ・自分の意見を堂々と主張すること ・会話において政治や宗教を話題にすること
草柳俊二氏 (ゼネコン→大学)	<ul style="list-style-type: none"> ●プロブレムシューターに要求される能力 : ・技術、契約、法律、経理、語学など各分野の高度な知識体系と経験 ・解決を導き出す強靱な胆力 ●社会基盤整備に携わる技術者が果たすべき 3 つの機能 (特に ODA である) ・使命と政策 : 「何をつくるのか、何のためにつくるのか」を明確にする機能 ・技術開発と絶えざる技術革新 : 「つくる技術」を探求する機能 ・マネジメント : 「どのように上手くつくるか」を考え実践する機能 ○部下や後輩に家族帯同での海外赴任を勧め、海外で仕事をする父親の姿を家族に見せるべきだ。

学生からの海外勤務についての意見と現状報告

岡部 真佳

海外を希望するようになったきっかけ

私は海外勤務を希望しています。メディアを通してアジアやアフリカ等の発展途上国の生活を知りました。衝撃的な映像の数々。食べる物や生活する家、その他私が普段の生活で目している物のありがたみとか周りの人の支えを知りました。日本で生活している事の幸せを感じました。それまでは自分の夢は明石海峡大橋の様な長大橋、黒部第四ダムなどの大型構造物を作ることでした。プロジェクト X で放送していたような、最新技術と大規模な工事、さらに地理的な困難さなどに立ち向かい、克服できる技術者になれば格好良いという自己満足な欲求を満たすことでした。しかし、海外の衝撃映像は、人の役に立つことに従事し、これまでに人から受けた恩に報いたいと思わせました。誰に恩返しする？と思ったときに外国の貧しい国で生活している人々が頭に浮かびました。それ以降、土木という文明工学を学んだ知識を途上国支援というフィールドでどの様に活かせるのかを考えるようになりました。漠然と、発展途上国で構造物を建設すれば良いのではないか、その工事の指揮をとる立場に就いて、現地の方々のニーズをより反映した物を作ろうと考えました。こうして海外志望となりました。

海外勤務のための学生生活

まず海外事情を知りたいと思い、外国人と話すようになり、留学生の友達が増えました。イギリス人・ベトナム人・インドネシア人・アメリカ人・中国人・韓国人・ネパール人と話をしました。一緒にお酒も飲みました。考え方にはそれぞれのお国柄が表れており、日本にいてもカルチャーショックを受けることができるというのを感じました。

研究室配属と海外調査

外国人の考え方などは何となく分かってきて、海外工事というものがどういうものなのかを



学びたいと考え始めました。高専や大学の講義の中では海外工事についてのノウハウ・現地の雰囲気・どの様な人が海外で活躍しているのかを知る機会は無かった。4年生になり卒業研究の担当教授との面談で海外勤務を希望していることを伝えると、海外調査の機会をつくってくれました。ベトナム、カンボジア、ウズベキスタンで生態系と水文の調査を実施しました。熱帯、

図1 ベトナム・ホーチミン大学の学生と先生の水質調査の様子

乾燥地域を体験しました。現地研究者と英語でやりとりする場を経験しました。非常に不便でした。現地の人の上に泊めてもらい子どもたちと遊びました。途上国の生活の大変さを知り、是非こうした国々のインフラ整備を進めてみたいと思いました。

懇話会に参加した感想

海外プロジェクトの知識を増やそうと思っていたところ、当委員会の懇話会を紹介され参加しました。海外で活躍されてきた方々の海外経験や実績、そしてその苦労や喜びを聞くことができました。登壇者が自分の仕事に誇りを持っていること、楽しみながら仕事に就いていることが印象的でした。たくさんの魅力を持った方々で、私の頭で思い描いた格好良い技術者像が登壇者となっていきました。ますます海外での仕事に対する夢が大きくな



図2 ウズベキスタン砂漠地域に住む子供と私

りました。さらに、現地技術者育成でも貢献していることを知りました。インフラ整備だけでなく、現地若手技術者を育て、その国の将来にまで貢献している姿はプロフェッショナルを感じました。そして優しい。現場の職人を相手にしてきた経験から頑固で威圧感はかなり強いのではないかと感じていました。しかし、全く逆。親しみやすく真摯だった。これらの他にも契約形態の違い等も議論され、国内外では多くの問題点・改善点があることを漠然とですが知りました。その面についても海外事業に立ち向かう心構えは出来たと思います。

まとめ

留学生との交流だけでは専門分野を知ることは出来ませんでした。想像と現実のすり合わせが出来る場というのは学校には多くないと感じました。私の場合は、研究で海外の一部を知ることが出来ましたが、このような懇話会は必要で、そこで生の技術者にふれるというのは学生にとって大変重要だと思いました。学生が行ける範囲内で実施されればなお良いと思います。

説明会などの就職活動中に話をした学生の中では、海外勤務希望する学生は半数近くいました。しかし海外現場について知っている学生は稀でした。学生の力で知るには限度があると思うので、学校・研究室などにサポートする体制が必要だと感じました。こうして早くに目標やそれへの課題を見つけて、準備する時間を学生のうちに作れる様な仕組みが出できれば海外勤務へ出やすくなると思いました。

若手技術者からの海外勤務についての意見と現状報告

瀧田 陽平

1. 「国際貢献」に関する仕事を志したきっかけ

●大学時代における研究

熱帯モンスーン地域における傾斜農業の土壌侵食防止に関する研究(インドネシア・バンダランポンにて)

実験中インドネシアの大学の先生宅に2週間滞在し、その時に発展途上国における生活レベルを実感。国際貢献に関する仕事を志すきっかけに。一方では、発展することが真の幸福につながるのかどうかを葛藤。

●旅行

北中米3カ国・ヨーロッパ4カ国・アジア10カ国、25回の渡航

最も印象に残っている風景は、アジアの中でも最貧国であるカンボジアとラオスの農村地域。家の造りや、着ている衣服等全てに衝撃を受けました。

2. 青年海外協力隊について

●目指したきっかけ

大学における同研究室の先輩、後輩がチリとタンザニアに一人ずつ参加。日本では得ることのできない経験をつめるのではないかという憧れ。

●試験結果

大学院を卒業後、青年海外協力隊を目指し農業土木分野にて3回受験するも、合格せずに断念(その内1回は2次の面接で不合格)。

●NGOと民間企業との違いを意識

青年海外協力隊はNGOではないものの、一部似通っている側面があることから、受験をきっかけにNGOと民間企業の違いを意識。

NGOは非営利団体であり、民間企業は営利団体。お互いに穴を埋めあう形で国際貢献を行う必要があることは事実であるが、自らにとってどちらの形態において仕事をするのが理想なのかを自問自答。結果として、民間企業を選択。資本主義経済下においては、会社の社会的責任と、利益を最大化する行為そのもの(仕事内容)が直結している民間企業型の国際貢献に魅力。

3. 国際貢献のあり方

●先進国における国際貢献の持つ意味

地球市民としてグローバル経済の恩恵を受けている我々先進国の人々は、途上国に対して何らかの形で援助することは当然の義務なのではないか。

●民間企業における国際貢献の方法

民間企業の枠組みの中で国際貢献に関する仕事を考えた場合、商社でのフェアトレード推進、ゼネコン・コンサルでの土木関連、農村開発関連等のハード・ソフト事業などが対象。

●土木技術者として国際貢献

商社と比較した場合、より直接的に途上国の人をステークホルダーとして含むゼネコン・コンサル会社の土木技術者として国際貢献を目指す。ハード・ソフトの両面におけるインフラ整備に魅力。

4. 国際協力小委員会に参加した感想

●懇話会について

懇話会は、コンサル・ゼネコン・大学関連等の幅広い分野において、実際に海外業務に携わってきた方の話を聞く良い機会に。改めて、海外における仕事の楽しさを実感すると共に、国

内業務に従事している中におけるモチベーションアップにも。

●積極的、自主的参加の重要性を認識

自ら動いて行動することによって、状況を変化させることが出来ると実感。人とのつながりが増え、情報が増え、様々な経験が増えました。

5. 今後の方向性(まとめ)

●国内業務の位置付け

「技術」という点に関しては、国内の業務と海外の業務の間において共通する部分はかなり多くあるのではと思う。

●現状に対する不安と焦り

「技術」においては、国内業務中に身に着けることができる部分があると分かっている一方で、時間は国内業務に従事する中で過ぎていくため「本当にいつかは海外業務に携わることができるのか」という不安と焦り。

●自己研鑽の必要性

国内業務では身に着けることが難しい英語等においては、日々の自己研鑽において習得が必要。ただ実際には、仕事を言い訳にしてなかなか実践はできていません。

●将来的な希望

今から 5 年後、35 歳ぐらいまでには海外業務に携わってきたい。可能であれば、場所はアジア内を希望。

国際競争力小委員会の研究活動について～海外からの報告～

大谷 仁美

私は、今、途上国農業開発に関する修士論文のために、インドネシアのスラウェシ島に来了います。

国際競争力小委員会の研究活動としては、「人材」という部分を中心に講演会をひらいたり、勉強会を行ないたいと思います。

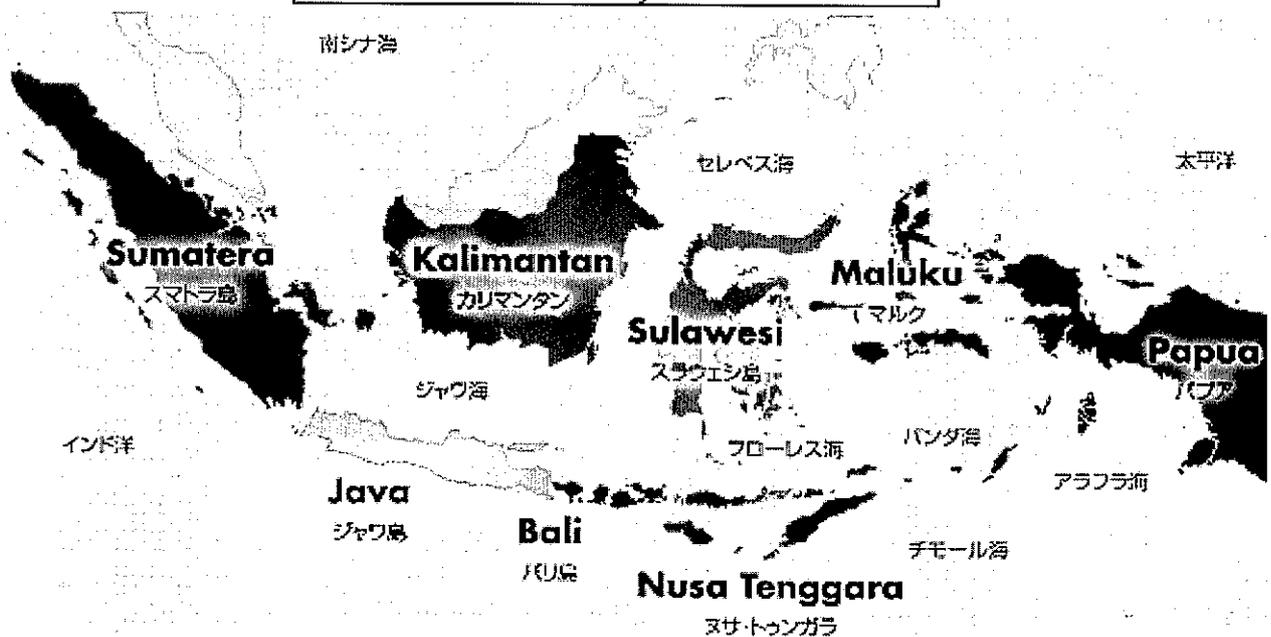
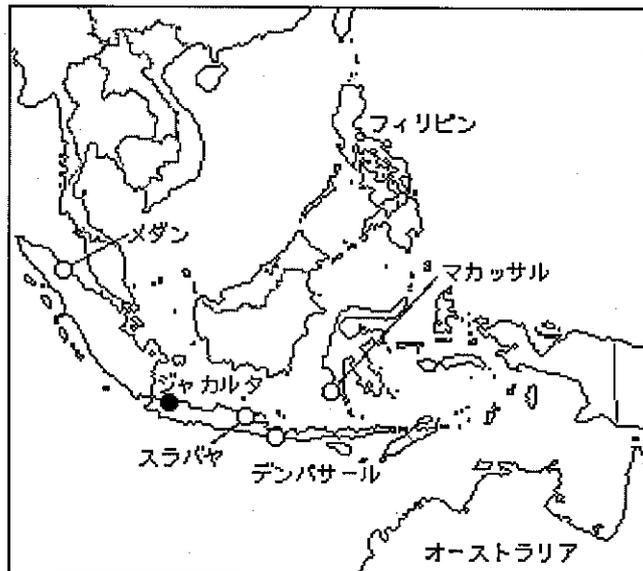
具体的には、

①今後、海外での建設事業に関わる際、必要な人材とは？

②第一線で活躍されている方を呼んで、プロジェクトの中でどのように日本人として存在感を見せていくか

③海外で働く上での心構え

このように海外のプロジェクトで通用する人材をつくるという目的のなか、企画が行なわれるといいのではないかと思います。



新しい文明づくりの発信者

佐藤 正則

異なる文明世代

いつの時代にも、世代間格差（ジェネレーション・ギャップ）は存在していたはずですが、でも現在の日本ほど顕著な格差に直面した時代は、過去においてもなかったでしょう。

いま 60 歳以上の世代は、人間の生理を超えない速度の生活リズムの中で幼少時代を過ごしています。その子どもの世代は、電化製品、マイカーが身近な必需品の暮らしの中で育ちました。さらにその子どもの世代は、パソコンや携帯電話が生活の一部となっている時代に生まれています。

つまり、それぞれの世代は、知識の吸収や精神の形成の手段が全く異質の出発をしているのです。それは世代間格差と言うよりは、文明間格差（シビリゼーション・ギャップ）と言えるほどのもので、これほどスタート時の文明の異なる世代が 1 つの時代に巡り合わせたのは、日本人の歴史において初めての経験でしょう。

その異なる文明世代が共有し合えるテーマを見出し、21 世紀の日本人の『国民プロジェクト』を創り出せるとしたら、それは日本人が古代から育んできたシビル・エンジニアリングに根ざした『新たな文明づくり』への挑戦ではないかと考えるのです。

ミリタリー・エンジニアリング

近代以降の日本のシビル・エンジニアリングは、欧米の技術と思想に大きく依存して成立しています。産業革命を実現した欧州の近代技術は、人類史上比類なき経済発展をもたらし、人間の精神、価値観を一変させたほど強力なもので、高く評価されてしかるべきです。でもその近代技術（科学技術）は、自然を征服、支配の対象と捉え、自然を無料の資源、素材として利用する思想に立脚しています。

ですから人間の豊かさや安全を拡大する「シビル・エンジニアリング」は、自然にしてみれば一方的な略奪や搾取を余儀なくされる「ミリタリー・エンジニアリング」であったわけです。そのことに寡黙に耐えてきた自然もさすがに音をあげ、無償の提供者であることを拒絶し始め、人間は大きな危機と岐路に立っています。

このまま自然（資源）の奪い合いが続けば、力（経済、軍事）の強い者が勝利する道を突き進むこととなります。その破滅的な道筋をストップするには、経済的、物質的な豊かさに代わる豊かさや安寧を希求できる『新たな文明』を模索する必要があります。

国民プロジェクト

近世までの日本の土木事業は、自然を征服や略奪の対象とは捉えずに、自然と人間が折り合いをつけて共生する思想に立脚していました。つまり、日本のシビル・エンジニアリングは、「サステイナブル・エンジニアリング」だったのです。

そこに私たち日本人が『新しい文明づくりの発信者』になれるヒントと可能性が隠されている気がするのです。

幸か不幸か日本は他の先進国にさきがけて人口減少に向かい始めており、これまでの経済成長にしがみつかない“秩序ある後退”・“緩やかな前進”を受け入れる勇気が求められています。日本は 2050 年まで CO₂ 半減を目標にしていますが、それを達成すると昭和 30 年代前半の日本人の生活速度に戻ると予測されています。その時代に少年期を過ごした私の経験からすると、生物としての人間の生理にマッチした心地よく快適な速度でした。

異なる文明世代同士が『新しい文明づくり』を共有テーマにして、『国民プロジェクト』として取り組む価値は大にあると思うのです。シビル・エンジニアがその率先者、担い手となり、『新しい文明づくり』を日本から発信することが、21 世紀の国際貢献になると考えるのです。

The Concierge to International
Activities for Civil Engineers
Messages from Seven Professionals

May 2008

Japan Society of Civil Engineers

目 次

まえがき	廣瀬 典昭	1
I 道を造りて歩みし道	加藤 欣一	
掌の中の「ひも」は世界平和にのびている		5
「伝える」と「伝わる」の違い／動機も出発も学生の時だった／湾岸戦争と髭の 少し哀しい話／豊かな感性と創造力の「真心」／土木技術者がもたらす国益		
II 海外土木屋人生 25 年	土屋 紋一郎	
老技師が言った「YOU ARE MY FAMILY」		29
リハーサルのない土木のドラマ／紙幣と切手に印刷された橋／入社 2 カ月で 海外現場へ／「YOU ARE MY FAMILY」／土木技術者は魅力的な人間		

目 次

注	III 地球公共財を創る土木技術者 吉田 恒昭		
	「飢えた子を前に何ができるか」を問いながら	55	
	転職ではなく天職だった／ひとりでアジアに向かう／アジア開発銀行の意義		
	／旅は終わっていない		
	IV ライフワークの途上国農業開発 佐藤 周一		
	受益者の「顔が見える、名前が見える、心も見える」.....	79	
	8万ヘクタールの「小規模灌漑」／「輪」が連鎖して「環」に／民衆が支持した公共事業／嘘のような本当の話		
	V 日本と海外で造った10のダム 福田 勝行		
	労苦を共にして「人を育てる」「人が育つ」喜び.....	103	
	進路を決めた「建設」の社名／原初的技術と最先端技術の融合／海外の現場から日本人が減少／人間は誰でも1日24時間		
	VI 海外建設ビジネス実践者現学 市川 寛		
	「契約」は複合民族社会の必然のルールだった	127	
	香港での「雑学研究を始め」／「ヴェニス」の商人に見る契約／公平性と対等性と階級制度／技術プラス人間性が「技術力」		
	VII 国際社会を生き抜く技術―胆力と知力― 草柳 俊二		
	「プロブレムと向き合う旅」はまだまだ終わらない	153	
	戦場の街で書いた論文／未開の島に都市を出現させる／「地図に残る仕事」の現場／大学間の協定で人材育成支援		
	あとがき 佐藤 正則	179	
	講演者の略歴	181	
	「世界で活躍する技術者たちの懇話会「夢」開催記録	189	
	土木学会コンサルタント委員会 国際競争力特別小委員会 名簿	190	
iii	用語解説	巻末	目次